「かわいい！」だけじゃない
－動物園が生き物を通して伝えたいこと

末竹 純（長崎バイオパーク飼育展示課 学芸員）
報告者：卓彦伶（北海道大学文学研究院）

「となりのしばふ」の第2回では、日本初の人工哺育で育ったカバや、冬の風物詩であるカピバラ温泉など、動物と近距離で触れ合える動物園として人気を集める長崎バイオパークの末竹純氏をお迎えしました。

博物館と動物園の違いについて、末竹氏は「動物園は生物という広範なジャンルを扱い、そのための技術や手法が特殊である」と述べました。また、生き物を通してさまざまなことを伝えられる点も特徴として挙げています。一口に「動物園」と言っても、設立主体や立地、展示手法などの違いがあり、同じ動物を扱っている点は共通しているものの、まったく同じ動物園は存在しません。伝えたいことや手段も多様であり、今回は長崎バイオパークの取り組みや考え方をご紹介いただきました。

長崎バイオパークは長崎県西海市に位置し、1980年に開園した民間動物園です。約150種（1,500点）を飼育しており、園内の面積は約30万㎡で、一周するのに約2時間を要する広大な敷地を有しています。その広さを活かし、長崎バイオパークでは東京農業大学名誉教授・近藤典生先生の監修のもと、檻や柵をできる限り減らし、来園者と動物が自然に出会って触れ合える空間を創出しました。

長崎バイオパークは、「人と自然の共生」を目指し、動物の魅力を最大限に引き出すことを理念としています。公式ホームページには、次のようなことが書かれています。

バイオパークではお客様が歩く道で、ミーアキャットやキツネサルなどの動物に出会うことがあります。フラミンゴやカピバラなどの飼育場では出入り自由で、彼らと人間との世界に隔たりはありませんから、近づくことも、触ることも、さらにはエサをやることもできます。ただし、人間が一方的に動物を観察する側に立つことはバイオパークではできません。

このように、「動物の魅力を引き出す展示」を通じて、動物のしぐさや行動を間近で観察してもらい、触れ合いを通して動物の魅力を知ってもらうことを重視しています。そして、「人と自然の調和」や「自然の尊さ」を伝えることを目的とし、動物と人間の双方向の関係性を築くことを目指しています。

また、動物たちが本来持つ野生の行動を引き出す飼育環境を整えることにも力を入れています。その結果、市民ZOOネットワーク主催のエンリッチメント大賞において、2009年に「水辺で暮らすカピバラのエンリッチメント」で大賞を受賞し、2023年には「アメリカビーバーに野生本来の行動の機会を与える取り組み」でインパクト賞を受賞しました。

末竹氏は民間企業が運営している動物園の特徴として、「動物の移動や展示計画がやりやすい」、「イベントの発案、実行がしやすい」、「会社の判断で資金は融通が利く」、「現場判断で物事を進めやすい」といった柔軟性がある一方で、「利益をしっかりと確保しなければならない」という厳しい現実もあります。民間動物園として、「種の保存」「教育・環境教育」「調査・研究」「レクリエーション」という動物園の4つの役割を果たしつつ、経営的なメリットを見出すことの難しさについても語られました。長崎バイオパークでは、動物園としての使命を全うしながら、コンセプトとの一貫性を保ちつつ、収益とのバランスを意識し、民間動物園ならではの自由度を活かした運営を行っています。

最後に、末竹氏はIUCN（国際自然保護連合）のBaba Dioum氏の言葉「最終的に、私たちは愛するものだけを守り、理解するものだけを愛し、教えられるものだけを理解する」（1968年）を引用し、長崎バイオパークは生き物を通して伝えたいことは「知るきっかけをつくり、自然環境・生き物たちを後世に残したい」と語りました。

動物園、とくにふれあいが可能な動物園は、「かわいい」というイメージが先行しがちです。しかし、今回のお話を通して、長崎バイオパークは「動物とのふれあい」を特徴としながらも、それを通じて「人と自然の関係性」や「生き物に対する理解」を深める場であることが伝わってきました。

「かわいい」のその先にあるメッセージを、ぜひ感じ取っていただければと思います。